

# 博士学位論文要約

論文題目：                   メディアの女性文化：  
                  テレビドラマにおける女性表象とその社会的意義  
                  —NHK 朝の連続テレビ小説を例に—

氏名： 黄 馨儀

## 要約：

本研究は、戦後の主流メディアのひとつである NHK 朝の連続テレビ小説（以下、朝ドラと略する）を研究対象とし、日本のテレビドラマにおける女性表象及びその社会的意義を検証したものである。

本研究は、時系列的に朝ドラの変化を追いながら、朝ドラの代表的な作品を選出し、その中で映し出された日本の女性像と家族関係を焦点に、テレビドラマと社会の文脈の関連を探ることを目的とする。メディア研究の範疇における、送り手、作品内容、受け手という3つの分析側面のうち、より社会的文脈との関連性を追究できる番組自体の内容に注目する。本研究は J・フィスクの方法を援用し、質的内容分析を主に、数量分析を補助に行う、第一次テキスト分析である朝ドラの映像分析に加え、朝ドラに関する記事報道を収集し、第二次テキスト分析を行う。研究範囲となる50年間の、5つの時期に分け、1961年から1974年までを第1期の「成立期」、1975年から1988年を第2期の「全盛期」、1989年から1999年を第3期の「移行期」、2000年から2010年を第4期の「変動期」、2011年以降を第5期の「回帰期」とした。映像検証可能性、海外放送、視聴率、記事検索ヒット件数、物語背景といった選出基準を設定し、第一次テキスト分析の研究対象を、各時期に2作選出した。第二次テキスト分析は、主に『週刊 TV ガイド』を素材に、1961年から2011年までの50年間の作品の特徴、傾向を探り、朝ドラ作品の外部から、朝ドラの語られ方についてまとめ、分析する。

第1章は朝ドラの成立期を対象に、1961年から1974年までの作品の特徴を考察した。朝ドラの制作背景にはラジオドラマ、15分単位制という放送形式にはアメリカからの影響があった。また、50年代以降、家族を題材に扱うホームドラマが朝ドラの土台として存在していたことも朝ドラの成立に影響している。初期の朝ドラは、新聞朝刊の連載小説を意識して制作したという制作者側の認識があった。現存する映像及び雑誌から考察した結果、成立期の朝ドラには以下のような特徴がみられた。まず、初期の朝ドラは文学作品から出発したが、1966年の『おはなはん』の人気によって、「女の一代記」へと方向転換した点である。制作の方向転換のきっかけは、女性から大きな支持を得たことである。つまり、朝ドラの高視聴率を支えているのは、高度経済成長期の「現代主婦」であったといえる。さらに、『おはなはん』のヒロインが現在周知されている「たくましく生きていく」朝ドラのヒロインの原型であり、朝ドラの1つのパラダイムとなっている。朝ドラの内容については、「家族もの」と「一代記」が両柱となっており、「男性の不在」、「戦時の女性」という特徴を持つ作品は、1966年以降の作品に集中している。また、初期の作品の女性主人公は兼業主婦として働き、夫や父の不在によってその強さが強調される。彼女らは、自営業、もしくは在宅での仕事であることが多く、この設定は同時代のホームドラマと類似していると指摘できる。

成立期を土台に、1975年から1988年の朝ドラは全盛期を迎えた。70年代後半から80年代にかけて、テレビが次第に人々の主な娯楽となった。しかし、80年代前後には視聴者の「テレビ離れ」という現象が指摘された。女性の社会進出がひとつの要因とされた中、朝ドラは続々と高視聴率をマークし、「国民的番組」と呼ばれるようになった。この背景には、「朝」という放送の時

間帯が関係していると考えられる。全盛期の作品に対し、特徴をまとめる「要素分析」を行い、データを数値化した結果、24 作中、20 作が明治大正昭和を背景とし、現代ものはわずか4 作であった。さらにヒロインの職業をみると、自営業を営む兼業主婦が70%を占めている。また、全盛期の朝ドラの特徴として、「戦争」の要素が81%、「男性の不在」が75%であり、両者の関連が61%という高い数値を占めていることが指摘できる。さらに、戦争によってもたらされる男性の不在は、女性の銃後の守りと深く関連している。1983年『おしん』、1985年『藩づくし』に対し、映像のテキスト分析を行った結果、男性の不在という特徴は、同時代のホームドラマと一致していた。朝ドラにおける男性の不在は〈母親中心ドラマ〉と同様に、高度経済成長期に企業戦士として召集された夫たちに対する妻たちの心情と現実を語っているかのようなのである。戦場に向かう男性と、家を守る女性という戦争描写を通し、歴史を語ることによって、当時の視聴者に戦争を再体験させる。これは、戦時と戦後の性別分業構造の置換に関係していると考えられる。

1989年、平成へと年号が変わると、朝ドラも物語の時代背景を「現代」に転換した。その背景には、同時代の女性の社会進出と労働率の上昇がある。従来、主な設定であった明治大正昭和ものが減少し、現代ものが61%に上昇した。それと関連し、戦争要素が含まれる作品は28%に減少した。なお、男性の不在は物語の背景と関係なく、依然67%を占める重要な設定となっている。また、朝ドラのヒロインは、職住一体型の兼業主婦が72%であり、家の伝統を維持し、家業を継ぐ設定に集中している。自営業は女性の仕事と家庭の両立を実現できる空間として設定されている。また、作品の映像分析から、1996年の『ふたりっ子』では、ヒロインたちが仕事と家庭の両立に悩まされ、女性の自立の難しさを語っているということがわかった。1997年の『あぐり』は、明治大正もの、戦争、男性の不在といった設定が取り入れられた作品でありながら、90年代の作品の特徴といえるヒロインの仕事と家庭の両立への葛藤が描かれた。具体的なデータを取り上げ、第3章では、現代女性を取り巻く人生の選択、仕事と家庭の「二者択一」という現状を、『ふたりっ子』の映像を通して実証した。なお、『あぐり』では、戦争に対して距離感のある描写や、ヒロインは波乱万丈の生涯ではなく、軽快な設定となった特徴から、90年代後半の『あぐり』では社会背景や時代の変化に応じて、当時代に相応しい「女性の奮闘」が表現されていたと考えられる。

朝ドラの第4期、転換期の分析は、2000年以降の朝ドラが全面的に「現代」の女性を描くという特徴に注目し、さらに朝ドラにまつわる「視聴率の低下」の言説を新聞記事から検証した。第4期の朝ドラの要素分析をまとめた結果、現代ものが77%に上昇し、戦争要素が14%まで低下した。これに対し、男性の不在は相変わらず52%という、成立期、全盛期、移行期から変わらず高い割合を占め、朝ドラの物語設定に欠かせない要素であることを確認した。また、第4期の朝ドラのヒロインは女性職に就く傾向、物語の中盤、結末では、公的空間での職をやめ、「女将」「自営業」に転身する傾向がある。これは、2001年の『ちゅらさん』、2007年の『どんど晴れ』の二者ともにみられた。21世紀の朝ドラのヒロインは、伝統を守る女性として表象され、女性の自立の成立をキーポイントとして考えると、職場と家が結びつくという設定は、視聴者に向けて伝統的な「家文化」を語り、現代女性の奮闘を家業に結びつけることで、女性＝家を支えるという役割を具現化しているといえる。

第5章では、回帰期の作品であり、朝ドラの50周年記念作である2011年の『おひさま』を分析した。テキスト分析と雑誌、新聞記事、ブログ、掲示板の言説を照らし合わせた結果、ヒロインの陽子は母性が強く描かれ、母＝暖かさ＝太陽というメタファーとメトニミーの作用が映像と言説の分析結果に相互に対応していると指摘できる。また、戦争時期を描く昭和の懐かしさと共感はこの番組の人気を支えたといえよう。

本研究の分析をまとめ、朝ドラの女性像、特徴、番組の機能を時系列に観察した結果、朝ドラのヒロインの多くは結婚し、職場を自宅と兼ねる兼業主婦として表象されることがわかった。ま

た、朝ドラで描かれた女性の自立は、家計を助けるために職に就くことで描かれることが多い。第3期以降は、社会の変化を反映し、現代女性の個人のための自立が見受けられたが、それに伴い「家庭か仕事か」の二者択一の選択に追い込まれる。朝ドラの中で女性の自立、家庭と仕事の両立が可能な条件は「女性職」かつ、明治大正昭和というテーマに限られている。さらに、ヒロインの人生を、家と強く結びつく家業（自営業）にたどり着かせる傾向は、視聴者に向けて、女性の人生の帰属を語っているようにも解釈できる。朝ドラの成立については、朝ドラは最初から「女の一代記」ではなかったこと、家族を軸に物語を展開させた朝ドラは、ホームドラマの1つの枝分かれした存在であることが指摘できる。戦争を主な設定として扱う全盛期の朝ドラは、男性の不在、戦争体験を語ることによって、戦時のジェンダー的構造を朝ドラの映像を通し、視聴者に再体験させる役割がある。なお、朝ドラでの戦争描写は、女性の銃後の守りを中心に描き、60年代から2011年までの作品で表現の一致が確認でき、ヒロインの多くは反戦の立場であったことがわかった。

本研究は50年間の傾向と変化を観察し、朝ドラにひとつの系統的且つ実証的な研究を提供した。また、朝ドラの作品に関する記事の数量及び内容を確認したことによって、朝ドラの内部だけではなく、外部から朝ドラの社会との文脈を掴むことができた。最後に、メディアとジェンダー研究においてこれまでの朝ドラと主婦、女性視聴者の研究の空白を埋め、日本における「女性ジャンル」の下位概念からメディアの女性文化を論じることを試みた。